

中日友好医院和日本方合作研究
重点项目(研究中心)

申 请 表

项 目 名 称 : 胸部肿瘤的早期诊断及放射和中药综合

项目负责入 : 李佩文 周伟

中日友好医院科教处
一九九六年制

二、立论依据

恶性肿瘤是人类健康的头号杀手，已引起心脑血管病成为致死原因的首要，我国每年恶性肿瘤发病人数约160万，死亡130万。为此，恶性肿瘤防治与研究已成为全世界科学家日益关注的课题。

肿瘤早期发现工作同国别、地区和物种而异。中国是发展中国家，早期发现工作尚仅局限于某些肿瘤高发防治研究重点地区，而在广大城乡地区的大多数肿瘤患者常因早期无特殊症状及不知切到院就医检查，当症状明显来院确诊时多已属晚期。我院自1958年开院以来，肿瘤患者约为首任住院人数1/3，即全院1400张病床上肿瘤患者约占500人，这在我国已相当于一大型肿瘤专科医院。其中约2/3的肿瘤患者是下基层医院已基本诊断明确的用单纯西医或中医治疗无效的中晚期难治性肿瘤，转来我院求治的。另外肿瘤患者虽然在我院检查，但也多因经济困难而只有小部分被确诊为早期肿瘤，既在我院早期肿瘤患者少，主要原因是诊治水平低，水平低而关键是患者来院就医晚，不能及时来院检查。愈期越晚，治疗越难，预后也越差。故早期诊断、早期治疗尤为重要。

近年来，由于医学装置不断更新进步，放射物理及放射生物学的大进展，使放疗技术显著提高，在肿瘤综合治疗中的地位日益加强。放疗技术越来越向着高精尖的方向发展。新技术如立体定向放射治疗、高精度原野放疗、立体定向放射治疗(CSRT)等在放疗技术提高到一个新的水平。除根治性姑息性放疗外，放疗与手术结合(包括术前、术中、术后放疗)，放疗与化疗结合，放疗与热疗结合等综合治疗，使放疗范围逐渐扩大，疗效不断提高，使之成为恶性肿瘤综合治疗中不可缺少的重要手段之一。近年来，我院十分重视中西医结合治疗肿瘤，并逐渐形成特色，使之成为许多肿瘤患者来院我院求治的重要原因之一。中西医结合在治疗肺癌鼻咽癌肝癌食管癌及乳腺癌等头颈部肿瘤中，取得一定进展。培养了一批中西医结合肿瘤专业队伍，系

是该院肿瘤科，现成立中西医结合肿瘤治疗中心。在一定的资助下，定能建立健全该中心，定会使我院肿瘤治疗水平、中药配合放疗增效减毒研究等方面取得进步。

三、研究方案

1、研究目标、研究内容和拟解决的关键问题

研究目标：

本项目以头胸部肿瘤包括肺癌、鼻咽癌、肝癌、食管癌及乳腺癌等
为对象，以其早期诊断途径、高精度放射治疗及争取研制出放疗增效
减毒中药为目的。

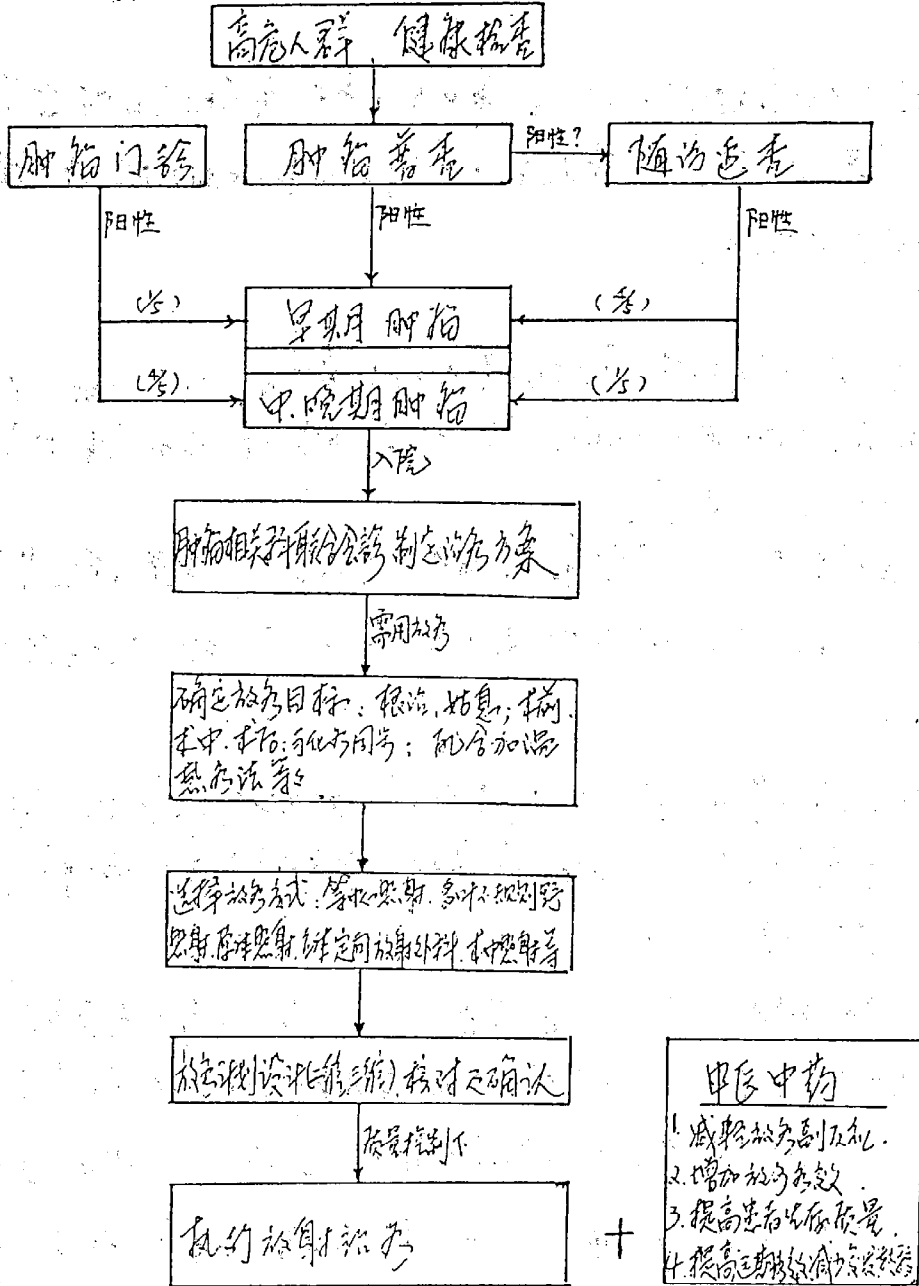
研究内容：

1. 研究探讨以最少花费获得最大收益的肿瘤筛查方法；开展多种
筛查的健康检查，对高危人群状态或癌前病变进行定期随访筛查；加深
认识肿瘤早期状态的研究。
2. 开展计算机控制多叶不规则照射、高精度原体放射治疗（包括打靶照射）
立体定向放射治疗（SRT）、立体定向放射外科（SRS）等新技术；进一步搞以
术中的研究。
3. 放疗增效方法结合放射治疗鼻咽癌、肺癌的增效减毒研究（临床及实验）；
放疗增效方剂剂型及药理学研究；单次或少次大剂量放疗减毒中药研究。
拟解决的关键问题：

1. 早期诊断筛查检测方法。 2. 高精度放疗运动及照射的质量保证。
3. 立体定向放射治疗（SRT）和立体定向放射外科（SRS）的运动及
剂量控制。 4. 术中放射治疗一次大剂量照射的剂量问题。 5. 中药中药
在单次大剂量照射中的放疗减毒作用 6. 研制出放疗增效减毒中药。

2、拟采取的研究方法、技术路线、实验方案及可行性研究

< 对胸腺肿瘤的早期诊断及预后和中药治疗研究 >



3、本项目的特色与创新之处

中西医结合治疗肿瘤是本项目的特色。

高精度放射治疗, 原肿瘤射(包括打靶照射)单次放疗; 中单次大剂量照射; 立体定向放射治疗(SRT)及立体定向放射外科(SRS), 都有常规(传统)放疗的分割照射全然不同。观察和减轻单次或少次大剂量照射的放射反应和损伤是当前研究的新课题。我国中医中药有几千年的历史, 在减轻放射反应和损伤, 减轻解毒方面有独到之处, 我们相信通过本项目研究定会走出一条中西医结合治疗肿瘤的新路来。

4、预期的研究进展和成果 <五年计划>

	早期诊断	高精度放射治疗	中医中药
一年	确定高危对象, 制定筛查方案 研究: 筛查 专家: 早期诊断	引进进口新设备, 自主研发 研究: 高精度放射治疗 专家: 放射治疗最新进展	确定早期诊断筛查早期放疗 研究: 中药筛查 专家: 放疗增效
二年	完善早期诊断筛查标准 研究: 早期诊断筛查 专家: 肿瘤防治新技术新方法	开展高精度放射治疗 研究: 立体放射治疗 专家: 立体定向放射治疗(SRT)	单次或少次大剂量放疗中药解毒 研究: 减轻放疗反应 专家: 放射治疗中西医结合
三年	建立筛查随访及随访体系 小结。	开展立体定向放射治疗(SRT) 研究: 立体定向放射外科(SRS) 专家: SRS适应症及剂量控制	集思广益, 开展放疗结合中药研究 研究: 中药放疗增强方 专家: 肿瘤防治中西医结合研究
四年	研究筛查随访, 筛查, 筛查及随访 随访早期发现的途径。	随访早期发现, 筛查, 筛查及随访 随访早期发现, 筛查, 筛查及随访 研究: SRS 专家: 放疗增效研究, LET	筛查增效方达早期临床水平 研究: 筛查增效方达早期临床水平 专家: 筛查增效方达早期临床水平
五年	使我院早期筛查检出率提高20~30%。	放疗早期发现, 筛查, 筛查及随访 提高20~30%, 我院肿瘤筛查检出率提高10%。	筛查增效方达早期临床水平 研究: 筛查增效方达早期临床水平 专家: 筛查增效方达早期临床水平

四、研究基础

1、与本项目有关的研究工作积累和已取得的研究工作成绩

1. 本院具备较先进的肺癌检测手段。多年来,在CT、MRI肺癌早期影像学诊断积累了经验。在纤维支气管镜检查中,也发现一些早期肺癌。近年来,在CT、B超引导下,细针穿刺活检及微创活检快速穿刺活检技术的应用,使胸部早期肺癌的诊断率提高。细胞病理学及免疫组化等检测工作也取得较好成绩。
2. 本院放疗科长期以来,开展CT、MRI、B超在放疗领域中的应用,在国内率先应用计算机辅助的三维不规则野放疗、原野照射、打靶照射及术中放疗,在放疗各方面有较丰富的经验,具备立体定向放射治疗(SRT)及立体定向放射外科(SRS)新设备的条件。
3. 本院肺癌科在肺癌的冷消融、增敏减毒方面,经过多年基础研究已经取得很大成绩,在培养博士、硕士等,具备向深层次研究开发的条件。

2、已具备的实验条件

1. 肺癌原有的检测条件
2. 虽放射科大型仪器设备陈旧老化,但仍具备一定的条件。
3. 本院肺癌科有硕士43名,实验室内,在本院肿瘤研究所的配合下,可完成一定的实验研究。

3、尚缺少实验研究条件

1. 放射肿瘤科设备情况

我院放射科于1954年和1987年后引进东芝LMR-15D和三菱ML-20MIX两台直线加速器，由我院每年近2万人次的肿瘤患者进行放射治疗。随着使用年限的增长，机器逐渐陈旧老化，故障率逐年增高，使用率日渐下降。由于故障老化，东芝LMR-15D加速器，自1987年起已处于长期停机状态。目前，虽依靠三菱ML-20MIX一台加速器运转治疗患者，但也因患者急，使用期已九年，故障率也越来越高，长期处于带“病”工作状态中，且时常造成停机，延误患者治疗。为完成本项研究，保持中国肿瘤医院放疗科各项国内领先地位，完善和提高中国肿瘤医院中心，我院急需引进新的放疗设备（直线加速器及X刀）。

2. 中医肿瘤科实验室

目前尚缺少 1) CO₂培养箱 2) 超净工作台

3) 倒置显微镜 4) 低温冰箱

4、希望援助的条件

1. 直线加速器
2. X-刀 (X-knife)
3. CO₂ 培养箱
4. 倒置显微镜
5. 超净工作台
6. 冷藏冰箱

5、希望日方派遣专家，拟到日方学习的专业技术及人员情况

1. 希望由肿瘤学大学院介绍日本肿瘤早期发现、早期诊断方面经验
2. 希望派中方人员在日方学习掌握放射物理及治疗定向放射治疗等方面之先进技术
3. 希望学习中草药制剂技术。

五、经费预算

支出科目	金额 (万元)	计算依据及理由
合计		
有线加速器	¥80~100	
X-刀 (X-knife)	¥40	
CO ₂ 激光器	5	
倒置显微镜	5	
低温冰箱	1	
超净工作台	1	

心肺脑复苏的临床和实验研究

立题根据：中日友好医院是一所大型现代化综合性医院，位于北京市东北部朝阳区，邻近交通繁忙的三环路和四环路。这一带有新兴起的亚运村居住区、望都开发区，人口稠密。目前，医院定点医疗人数已在13万以上，朝阳区人口100多万。中日友好医院离中国最大的空港—首都国际机场最近，又毗邻风景旅游区八达岭长城、十三陵。

随着改革开放，旅游业的兴旺，近年来我院急诊医疗任务日趋繁忙。1995年急诊量48673人次，为1985年（7541人次）的6.5倍；最高日急诊量375人次，最高日抢救例数7例。

自1992年至今，我院成功抢救重大涉外灾害事故17起，救治49人，涉及日、韩、法、德、美、乌拉圭、秘鲁、香港、新加坡、印度尼西亚、台湾等11个国家和地区。尤其是对台湾东吴大学校长章孝慈先生的成功救治，在海内外引起很大震动。目前，中日友好医院在急救医疗方面已名声鹊起，中国境内发生的涉外急救事件，尤其是在急救任务最紧迫、情况最复杂、伤病员最重时，首先送往或转送到中日友好医院。这就要求医院进一步扩大急诊规模，提高急救医疗服务质量，开展急救医学的科学研究。

目前，中日友好医院急诊规模虽有所扩大，医疗设备得以部分更新，在国内处于领先地位，但与日本等国家相比，仍有较大差距。无论急救医疗设备，还是急救医疗组织系统方面，仍落后日本10—15年，不能满足社会的需求。

因此，在中日友好医院建立一个以医院为依托的急救中心是十分必要的。

在中日友好医院建立急救中心也是可行的。医院开设病床1300张，中西医临床科室齐全，辅助检查设施先进。同时，多次的重大涉外抢救使医院建立了完善的急救系统，取得了丰富的急救经验，练就了一只过硬的急救队伍。此外，由于医院所处的有利地理位置，中日友好医院被有关安全部门认定为北京市唯一适合开展空中急救的场所。

中日友好医院开院10余年间，急诊共抢救危重病人12000余人，其中进行心肺脑复苏1440人次（含DOA、near DOA），复苏成功率不到5%。这主要有两方面因素：一、急救半径过大，在4—6分钟内得不到有效的现场急救，耽误了心肺脑复苏的黄金时间；二、医院急救复苏设备落后，日本政府援助之设备

多已陈旧磨损，至今未得到更新，急救人员技术水平与日本等国相比尚有差距，急救医学研究得不到开展。

研究宗旨：通过科学研究，提高急救人员素质，扩大急救医疗规模，更新急救医疗设备，提高急救医疗水平。

研究方案：本研究分为初级心肺复苏（BLS）、高级心肺复苏（ALS）和长时期心肺复苏（PLS）三个阶段。

BLS阶段着重研究心脏骤停时，心脏按压产生前向血流的机制，对经典心泵学说和近年来发展起来的胸泵学说进行临床和动物实验。目标在于提高复苏成功率。为完成此实验和目标，特别要改善心脏骤停后4—6分钟的CPR技术，需要培训急救士4—6名，购置新型心脏按压器，装备功能完善的救护车若干辆。

ALS阶段重点提高危重病人呼吸管理和循环管理水平，这是初级心肺复苏成功后面临的主要问题。临床研究各种呼吸模式，PEEP、CPAP、SIMV以及高频通气等在CPCR中的应用。在循环监测中，重点开展有创检查和治疗，如CVP、S-G导管、紧急起搏等。因此，组建6床位的急诊ICU日益迫切，需要装备功能齐全的呼吸机、中央监护系统、床旁X光机、床旁血透机等。邀请日本专家讲授急救医疗的新技术，同时派2名研修员赴日本学习，为期1年，以掌握ALS新方法。

PLS阶段主要研究脑复苏，即缺血损伤脑组织的保护。脑复苏是CPCR研究的热点和难点。在心肺复苏成功后，约11-20%的病人有不同程度的脑损害。

本研究在于探讨脑复苏过程中，脑组织缺血损伤的病理生理变化及相应采取的复苏措施。脑缺血损伤时，自由基产生的原理及对策、脑血流变化及氧耗变化及对策。

在诸多因素中，我们重点研究脑缺血损伤时低温疗法。低温疗法有悠久历史，但目前对此方法仍有争论，即脑复苏时低温采取的时间、方法、程度各说不一。本研究拟采用亚低温（34℃）早期用于脑缺血损伤的保护，这就需要观察脑缺血家兔海马区组织在采取亚低温前后病理变化，观察脑缺血家兔采用亚低温前后脂质过氧化物和自由基变化。

很多文献报道，中药有清除自由基的作用。我们选用具有

很好醒脑开窍的中药—安宫牛黄丸（目前以做成针剂，可以静脉点滴和注射）作为脑复苏过程中的用药，与亚低温措施共同采用，以达到更好的脑保护作用。

完成本研究拟解决的关键问题包括脑组织局部亚低温形成的实验模型建立，亚低温的调控以及脑复苏过程中自由基测定、脂质过氧化物及 β 脑酚酞等生化活性物质的测定。通过这些参数测定客观地、科学地评价亚低温疗法和中医药在脑复苏中的作用，提高心肺脑复苏的抢救成功率，使患者能不同程度康复乃至回归社会。

完成此项研究，不仅有重大社会效益，而且有极大的科学价值。然而，脑复苏的研究涉及面广，需要人才培养和设备装置。拟请日本专家讲学，介绍缺血脑损伤保护的先进经验和先进技术，同时派人去日本研修颅压监测、静脉高营养、血液净化等技术，2名研修员，每人每期1年。此外，尚需要购置科研用品：深部组织测温仪、颅脑降温仪、血药浓度及神经介质、毒物等分析测定仪。

通过三阶段（5年规划）的研究，使CPCR程序化，完善急救中心，建立急救医学教研室，促进急诊医学的发展。

经费预算：350万元人民币

急救中心
-----心肺脑复苏 (CPCR) 临床和实验研究-----
五年计划

年度	临床	研究	目标和成果	仪器设备	专家讲学	研修
1	BLS (初级心肺复苏)	CPCR 时前向血流 ★ 心泵 ★ 胸泵	急救反应时间 5—10 分钟 ★ 复苏成功率 35% ★ 空用急救	★ 加护型救护车 ★ 新型心脏按压器	急救医学 服务系统 (EMSS)	急救士培训 4 名 (半年期)
2	ALS (高级心肺复苏)	★ 呼吸管理 ★ 循环管理	组建急救 ICU (六床位) 进一步 提高复苏成功率	★ 呼吸机 (PEEP、CPAP、SIMV) ★ 中央监护系统 ★ 床旁 X 光机 ★ 床旁透视机	急救医疗 新进展	有创检查和治疗 (CVP、S-G 导管、紧急 起搏) 2 名 (一年期)
3	ALS					
4	PLS (长时间心肺脑复苏)	缺血损伤脑组织保护 ★ 亚低温疗法 ★ 静脉高营养 ★ 中医中药清除自由基	复苏成功率达 45%—50% (世界先进水平)	★ 深部组织测温仪 ★ 颅脑降温仪 ★ 免疫分析系统 (血药 浓度, 介质, 毒物分析等)	脑复苏进展	★ 静脉高营养 ★ 颅压监测 ★ 血液净化 2 名 (一年期)
5	CPCR 程序化	急救医学教研室	完善急救中心		急救管理	

中日友好病院 1995年度業務総括

院長 陳紹武

1995年度、われわれは鄧小平同志が提唱した「中国の特色ある社会主義」理論と党の基本路線を、引き続いて病院の指導思想とし、「チャンスを見逃さず、改革を深め、開放を拡大し、発展を促進し、安定を保持する」という基本方針を真面目に実行してきた。

「科学教育で病院を盛んにする」という戦略をもって、より良く、改革と発展、安定の関係を処理し、病院の各部局は、持続・迅速・健全な発展をめざして努力した。衛生部の直接の指導のもと、本病院の職員は、1995年度を誇りある一年とすることができた。

数年来、本病院は早い速度の発展を持続してきた。総合的な力が顕著に増加し、職員の生活は明らかに改善され、社会主義市場経済に適応する能力が高められ、改革・開放の体質を基本的に形成することができ、各方面の業務は大きな成績をおさめることができた。

わけても喜ばしいことは、鄧小平同志の1992年の重要な講話と党の第十四回大会の精神の導きのもと、本病院の財政収入は三倍となり、職員の給与も三倍になったことと、多年の懸案であった、一日の外来診療2000人が突破達成されたことである。このように大きく発展をとげている本院は、衛生戦線において注目を浴びており、全職員はこれに大いに鼓舞されている。

1995年度は、94教育年の基礎の上に「質の年」を主眼としてしっかりとらえ、質の向上を各方面の業務の核心として、責任性・期限・効果の三つの要素をしっかりと把握し、管理業務のさらなる規格化、具体化をすすめた。

「競争は質を重視し、質は人材に頼り、人材は管理に求め、管理は効果と利益を生み出す」という思想は、いまや病院全体の共通した認識となっている。

1995年度は、より良くチャンスをとらえ、基礎に注意を払い、科学教育

を重視し、一連の喜ばしい基本的な転換をとげることができた年として位置づけることが出来よう。

私はこれらについて、幾つかの面で、以下の通り述べることができる。

一、チャンスをとらえ、時期を失することなく病院の進歩をはかる

本病院はまだ年若い病院である。わが国が逐次、市場経済に転換する新しい時期に、手強い相手が無数にある中で、生き残りと発展を求めて、危機感と緊迫感をもって、自己の強化を図ってきた。孔子は「三十にして立つ」と言ったが、病院の成功は、もっと長期のたゆまぬ刻苦奮闘が求められよう。

われわれが特に提唱したのは、“他人の優点は大いに述べ、欠点は小さく見ること。そして自分の優点は小さくとらえ、欠点は大きく見て、たゆまず努力し、止まらずに進歩を求める”ということである。

年若い時期の五つの特徴は「活気、進取、緊張、謙虚、そして良く学ぶ」である。この優位さを発揮して、頭脳を働かせ、知恵をめぐらし、一つ一つのチャンスをしっかり掴んで、病院の業務をおし進め、発展を促してきた。

ここ数年来、われわれは、“アジア・オリンピック”や“天皇来訪準備”“オリンピック指定病院の獲得”“三級甲種病院の資格獲得”“創院十周年祝賀”“パラリンピック”“世界婦人大会”などの機会をとらえ、止まることなく各種の管理業務を推進し、つねに各業務の基礎的な施策を整えた。これによって病院内外の環境に大きな変化が起り、病院全体の様相は一新された。

95年9月、北京で空前規模の国連第四回世界婦人大会が開催された。本病院は、わが国衛生界の窓口として、大会組織委員会から参観項目に決められ、同時に大会の医療保健業務を請け負った。“世界婦人大会参観接待計画”は大会組織委員会においてそのまま認可され、しかもきわめて良い計画であるとされた。“世界婦人大会安全防衛業務プラン”と“世界婦人大会医療保健業務プラン”は周密、詳細を極めたものであった。本病院の大会会場医療グループが診療治療にあった代表の数は、のべ 143人。病院で診療したものは

のべ 113人、入院したもの12人。そのうち救命救急患者は 3名、病院到着時にすでに死亡していた1名を除いて、その他の人々はいずれも治ゆ退院、もしくは処置をほどこしたのちそれぞれの国に搬送した。参観の接待をしたのは14の国と地域の、のべ 111名の代表である。彼女らは、清潔な院内、最新式の施設、良好なサービスに対し、「素晴らしい」「驚いた」と口々に語った。

共産主義青年団病院支部は、志望者を募ってサービス隊を組織し、世界婦人大会の代表に対して24時間の医療全科の質の高いサービスを行った。この大会機関中に、本病院の職員がチップの受取りを謝絶したのは8回、金額は全体で、米ドル 200ドルと人民幣 500元にのぼった。本病院の職員が7ヶ月半来の世界婦人大会業務を見事に完成させたことにより、大会組織委員会から病院が表彰を受け、また医療サービスグループと接待グループは上級嘉獎を、また保安グループは集団三等功勞獎、保安グループの処長は個人三等功勞獎を受けるなど、本病院の59名の同志が獎を獲得した。

われわれは、10数回にわたって外国人の重大な救命救急を行ってきた。この際の際立った救命救急、展望をもった準備、救急、接待、連絡、転送業務の適確、適切は本病院の救命救急の特色となっており、これはまた、非常事態に直面して鍛練された一群の救命救急の隊列を輩出することになった。

95年度においては、外事業務においてもまた新たな進展があり、病院に活気をもたらした。

われわれは実践の中から、自ら良く事を運ぶことが、外資を得る基礎であることを体得した。95年4月、本病院は、その着実に効果のある業務によって、ドイツの著名な企業家であり慈善家であるルドルフ・ワルト氏の信頼を得た。彼は、自主的に 200万ドルの拠出を申し出て、ルドルフ・ワルト中国伝統医学研究基金を設立し、本院が中医薬の研究を展開することを支持してくれたのである。

五日間弱の時間で、本病院は人民大会堂でとりおこなう基金贈呈儀式のすべての準備を整えた。4月16日、人民大会堂で“ルドルフ・ワルト中国伝統医学研究基金贈呈式”が盛大かつ厳かに挙行された。これには国家の指導者

と在京の著名な専門家たちが参加し、首都の30余のマスコミの150名におよぶ記者がこれを取材した。ルドルフ・ワルト氏は「かように短時間のうちに、これほど大きな活動を組織することはドイツでも不可能なことであるが、貴方がたはそれを成し遂げた」と感慨深げに語った。

本病院は「細、厳、聯、変」を外事業務の全過程においてしっかり保つことに努めてきた。毎回、事前に詳細な接待計画をタイプ印刷し、担当者が責任をもってスケジュール通りに事を進め、時間を違えず、整然と行うことは、思わぬ良い結果をもたらした。

日本の聖マリアンナ医科大学難病治療センターのセンター長・水島裕先生が本院を訪問された期間、本病院の各種基礎業務と業務効率に深く満足された。水島裕先生は、ご自分の特許成果の一つであるLipo-PGE1の生産技術を無償で本院に譲って下さった。Lipo-PGEは最新の薬剤であり、使用する薬剤量はこれまでの十分の一ですみ、副作用が減少、臨床応用効果は良好なものである。製薬工場のラインは95年にすでに全面的に稼働し、順調に進展している。これらは本院にたいへん良い社会的利益と経済的利益をもたらし、病院のこれからの発展に堅い経済的な基礎を築くことになった。

改革開放と社会主義近代化建設の新しい情勢のもと、党中央と国務院は、全国科学技術大会を開催し、科学技術の進歩を加速させることに関する決定をおこない、科学技術を第一の生産力とする思想を定着させることになった。

党の第十四回大会第五回中央委員会総会は、「中国共産党中央の制定した国民経済と社会発展の95計画と2010年までの長期目標に関する提言」を採択した。これにより、病院事業を発展させる良好な外的環境が整った。われわれは、時期を失することなく「科学技術による病院の発展」戦略を提案、実施した。本院は「科学技術による病院発展大会」と「人材工作」会議の開催を決め、事業発展計画と人材養成の“百人工程”を設定し、病院がたえず発展する基礎を固めている。

二、基礎に留意し、順を追って漸進する

基礎工作は事業発展の根本である。いかなる事柄もまず根っこから手を着けねばならない。樹木も根があってこそ枝が伸び、葉を茂らせることができる。基礎建設は、必ず順を追って漸進しなければならず、穏やかに着実に歩を進めねばならない。病院は「一日で千里を求めるのではなく、日々邁進する」という業務方針を提出した。

サービスを改善し、医療の質を高めることを決定し、本院は前後して「優良サービス週間」「全般良質サービス」「患者をわがこととするサービスデー」「百日良質サービス競争」などの活動を展開した。95年にはまた「双百工程」を行った。それは百項目の患者サービス、百項目の医療特色であり、病院の精神文明建設と職業建設を結びつけたもので、一年間に計 289項目のサービスが提案された。

引き続きおこなっている患者サービスには「病気相談姉さん」「健康橋」「看護サービス」「患者サービスセンター」「医者と患者の話し合いセンター」などがあり、本院の多角的な治療指導の体系を形づくっている。多角的サービスの中にはまた、来院した人々が「見上げれば標識があり、下に目を向ければカラーのラインがあり、質問には答える人がいて、用件には必ず対応する人がいる」というものもあり、初歩的ながら比較的効果のある医療サービスの特色となっている。

「患者第一、礼節をもった診療」は本院のモットーであり、病院は「チップは人を傷付け、それをふところに入れた者は規則違反」を明確に打ち出しており、本院の職業道徳建設は、新しい気風を生み出している。

医療サービスの三基三厳をしっかりとらえ、三段階医師の病棟巡回と三段階看護の合格率は98%に達している。院と部局、科の三段階の質量保持の業務は、毎月10日までに目標達成状況を改革事務室にフィードバックさせることにしており、定期的に“科主任例会”において状況報告をおこない、三段階カルテ管理を強化している。95年5～6月には本院においてカルテ展覧会をおこない、合計75のカルテが展示された。そのうち65は優秀なカルテであ

り、10はあまり良くないものであった。7月から10月まで本院では医療技術業務大検査を実施し、304の医療技術報告を抜き取り検査した。その合格率は90.8%であった。理論試験は64人についておこない、成績はおおむね良好であった。医務部は、20の科の96人の臨床医師に対して理論試験をおこなったが、成績は平均90点以上であった。

さらに急患診療業務を強化するため、各班ごとに急患科の年齢資格の高い医師一名を増加し、急患の調整業務を行わせ、また急患が立込んだ時には、看護婦長が分担診断をおこない「急患にはただちに対応し、検査報告はより早く、診察は時をうつつさず、処置は妥当であり、安全に搬送する」ことを進めている。95年度に、本院が受け持った外国人の医療急救は五回であり、7人を緊急治療した。それは四つの国と地域の人々であった。治療回復した人々の中には、日本国大使国広道彦氏、インドネシアの著名な華僑・林文鏡氏、韓国の著名士金永浩氏と、世界婦人会議のアメリカ代表 ANOFF女史がいる。この成果は、またも本病院の名声を高めた。95年度にはまた、人民代表大会、政治協商会議、中央農村工作会議、国際刑事警察大会および中央代表団のチベット訪問など11の重要な会議と工作の保健任務を見事に達成した。これらに派遣した医療保健チームは、12チーム、38人であり、連続して上級単位からの表彰を受けた。

文書業務の基本建設もしっかり行っている。院の総合文書室は、97点の成績評価で、国家二級文書管理単位となった。この度の文書管理の昇級をめざす一連の努力は、人材を育成し、チームを鍛えた。これによって本院の基礎的な質量の管理と、科学化、近代化は大きく前進した。目下、本院は各部門別と、キャリアー文書の集中統一管理を実現しており、1988年以來の各種文書の保管率は98%に達している。重要な科学研究課題、重要な基本建設項目、例えば病院本館、製薬棟文書、および高精度設備文書の管理達成率は95%。これらの業務は、病院全体の各部局、科、室にわたっており、同志たちは困難を克服して、黙々と大量の地道な基礎業務をこなしており、人々を感服させる業績を残している。

本院の人材育成業務は、基本建設の中で競争メカニズムを導入し、人材育

成を加速させ、病院の継続発展に人材面での保障を与えた。本院ではこれからの三年以内に、四分の一に近い科、室において後継者の選抜をしなければならない問題に直面している。また各科、室の学術リーダーの全体的な水準向上の問題がある。95年に本院は、12項目からなる人事管理規則を作り、人事情報ファイルと人材ファイルを作り、また“徳、能、勤、績”の四つの面から、幹部の考課を強化している。昇進、任命においては透明度を強め、競争メカニズムを導入して、破格の昇進と部署の提供の二つの重要な手段で、中・青年の科学技術要員が才能を発揮できるような良好な環境づくりをおこなっている。

三、科学教育の重視

1995年の科学研究において、本院は大いに科学技術に力を投入し、その成果のいち早い転換をおこなった。“ワルト伝統医学基金”と“来輝武科学技術基金”を設立し、100万ドルを科学技術に投入した。これにより、毎年20%の速度で増加を見ることができ、病院の科学技術の発展に活力を与えた。

95年は、本院にとって科学技術の成果が最も多い一年であった。

部（衛生部）クラス以上の科学技術の成果で得た奨は6つ。院クラスの成果奨は9つ（うち中医科学技術の成果は4つ）。11月末現在、本院が請け負った部クラス以上の課題は6つ。病院の科学研究基金によるものも、95年は大幅に増加した。院クラスの研究課題は63項目で、これは1994年の3.15倍である。

本院は、近赤外線生物光学実験室を初歩的に建設した。日本北海道大学脳外科の酒谷薫先生を客員教授として招聘し、定期的に研究をすすめ、この面での国内の空白を埋めた。神経遺伝室も建設準備中である。本院は神経系統の遺伝に関する研究でも、すでに大きな進展があった。1995年までに、全国範囲でjoseph病の20余の家系の系統資料を収集し、JOSEPH病の基因連鎖定位分析の研究を完成させた。本院はまた、WHO糖尿病予防合作センターを設立し、順調に進行させ、これは関連する科学研究の発展を促す作用を果たし

た。このセンターは、WHOがわが国に設立した初めてのセンターである。

95年には、大器官臓器移植臨床研究でも新たな進展が見られた。関係する科学研究室は、10月と12月に、兄弟機関と共同して肺臓と肝臓の移植手術をそれぞれ行い、初歩的な進展を得た。

国際交流と合作を強化することは、科学技術工作の重要な手段である。本院の神経内科は、日本新潟大学と合作してMJD研究をすすめ、わが国の神経内科の水準を発展させる代表となった。本院は日本から研究者1名と在米の中国訪問学者1名を招聘し、同時に日本の会社から20万ドルの設備資金を得た。

本院は、中西結合の基地となっている。近代的な技術によって、わが国の中医薬の宝庫を開発することは、本院の一つの優点となっている。95年にはまたルドルフ・ワルト中国伝統医学研究基金をもって、専門家による審査委員会の選考を経て、悪性腫瘍の治療薬などの項目を選び、これらは新薬開発の最初の開発項目となった。

本院は「科学教育で病院を盛んにする」という戦略のもと、特色ある項目を建て、長期計画を策定した。わが国の死亡率五位までの疾病について、中西医結合の優位さを発揮している。科学研究、臨床、教学が一体となり、基礎研究と臨床応用を結合させた十の研究センターの計画を策定した。この十のセンター構想と国際医学発展の先駆的科学領域は軌を一にしている。これら重点学科領域は臨床医学研究を展開し、中日友好病院全体の医療水準を高めている。

95年度に本院は、中国医科大学、北京医科大学、北京中医薬大学、ベチューン医科大学などの127名の本科生ならびに本院看護学校生の卒業実習の任務を引き受けた。また引き受けた進修生は283名におよび、うち15名はチベットからきた人々であった。院側はこれを重視し、彼等が迅速に学習出来るよう助け、チベット建設を支援した。

本院が95年度に受け入れた博士生は3名、修士生は7名であった。教育工作においては、突出した人材の育成をしている。95年度に本院が養成した研究生は73名、そのうち在職研究生は44名であり、“百人工程”を始めてから

10～15人を選抜し重点育成をしている。

継続教育にも力を注いでいる。

95年度の成人学歴教育の卒業者は18名。また48名が看護専門クラスに入学した。労働者技能資格向上訓練も行っており、これらはいずれも順調に進行している。95年に病院が採用した卒業生は73名であり、実習訓練の満足度は98.3%に達している。英語班、日本語班、コンピュータ班など、在職教育も盛んに展開されている。

衛生学校は、要員の素質を高めている。教学の質を保障し、新入生教育を強化するため、クラス主任の責任制を取り入れており、公費学生と私費学生の交替システムが、顕著な成績を生むことに役立っている。1995年衛生部系統直属全国大学、中等専門学校の「教育が人を育て、管理が人を育て、サービスが人を育てる」評価工作において、衛生学校は優秀と評価された。

四、喜ばしい変化

本院の医療業務は質の面で顕著な向上が見られ、サービス態度も改善が見られる。社会的な声望は高まり、国際的な影響も拡大している。1995年度の外来診療数は、月ごとに上昇する趨勢にあり、平均の外来診療数は1600人に達しており、最高の外来診療数は一日2400人を越えた。これは94年度に比較して30%の増加であり、病室の稼働率は90%を越えた。全院の治癒好転率は94%であり、これまでの最高の水準に達した。

「病院には重点があり、科には特色があり、人には専門長所がある」という事業発展方向に基づき、病院は特色を形成しつつある。

病院管理においては、段階管理を実施しており、重点となる科・室を設けている。現在は、心臓外科、胸部外科、心臓内科、腎内科の四つが重点科・室となっており、95年にはすでにある重点科・室の正式な評価を行い、重点科・室を強化すると同時に、今後の重点科・室の建設目標と実施方策を提出した。

95年5月、本院は朝陽区の大病統括管理指定病院となった。大病統括管理

業務は、病院発展のまた一つの好ましい機会である。本院は大病統括管理委員会と大病統括管理事務室を設置した。同時に、大病統括管理規定と実施細則を制定した。大病統括管理機構に含まれている機関の責任者たちは、前後二回にわたって本院を訪れ、状況説明をうけ参観した。現在までに本院と大病統括管理を結んだ機関は 417におよび、人数は12万6000人に達しており、本院が長い間抱えていた患者不足の問題を解決することにもなった。

95年の病院収入総額は1億5千4百万元に達した。これは四年間で四倍に増えたことになる。職員の年間収入も平均一万元（給与プラス賞与、各種加俸の合計）になり、四年間で平均四倍になったことになる。

95年度においては、通常の資金使用を保障したのと同時に、超大型医療設備を導入し、また職員から得ていた資金 350万元を償還し、薬剤工場の改造にも1000万元を使用した。また1000万元を職員用の住宅購入にも充てた。

病院の収支は初めてバランスがとれ、若干の黒字も出た。本年、病院では引き続き「計画一括管理、支出額制限、節約奨励室」を設けて、審査監督に注意を払い、一年間に合計 104項目について審査し、80余万元の経費を節減することができた。これにより、衛生部直属機関の中で模範となった。

病院の、営繕・用度など裏方部門の人々の“第一線サービス”の意識も絶えず強化されている。

一年間で、補修はのべ4009件、ゴキブリ退治11万平方㎡、各種被服の洗浄 803万点、事務用品用度90万点、弁当配達 600回をおこなった。また病院の通信を円滑にするため、本院は関係部門と協力して新旧の回線切断を行い、1000回線をもつ新しい交換台を開通させた。病院の医療器械の巡回メンテナンスは、過去の一季一度から一週一度に改められ、また臨床各部局の設備についても、メンテナンスと使用記録を項目に加え、補修された各種器械は千台弱となり、補修作業時間は12,000時間に達した。

95年の春節には、患者に大晦日の賑やかなテレビ番組を観賞してもらうため、営繕部門の職員は、外部の専門業者と共同して、日に夜をついで残業を続け、アンテナの改造工事を予定日以前に完成させた。

このようにバックアップ部門の職員たちは、労苦の汗で医療業務の正常な

進行を保障し、自らの“全身の汚れ”で、清潔で整った医療環境を保障している。病院の建物の塗装も行われ一新した。

五、その他の業務

計画出産は、わが国の基本国策である。計画出産業務について、本病院は“三つの主たること”の管理方針を堅く守り、国家規定の基本指標を達成した。本院の計画出産率は100%、晩婚率も100%。

本院はまた、老同志の政治待遇と生活待遇について真面目に取り組んでおり、「老いても、生活が保障され、成すことがあり、頼りとするところがあり、学ぶ機会があり、楽しみがある」という“老いての五つのある”を誠実に実行している。

加えて本院では、“老いて慰労がある”を提案し、毎年定期的に病院の発展現状を老同志たちに伝え、巡回訪問を組織し、彼等の批判と提言を聴取しており、こうすることで、老幹部たちは病院の発展に心から喜びを感じることができている。病院ではまた、老同志のために、生活補助、活動経費、人間ドック、保養など一連の仕事を行っている。

本院のコンピュータは、衛生部が組織した八五涉外項目に参加し、病院系統情報開発およびインターネットによって、世界的範囲の医療衛生情報を共有することになった。また95年の末には、入院処、財務会計処、薬学部センター薬剤室、化検科、放射線科の五つの科・室のライン化が基本的に完成した。これにより、本病院の全面的なコンピュータ管理に基礎ができた。

95年に本院は、中日友好病院第二回企業管理会議を開催し、1992年以來の「工をもって医を助け、副をもって主をおぎなう」経験の成果を総括し、今後は逐次、選抜・入札などの方式を取り入れ、各企業が危険負担をすることとし、さらに企業内部の経営管理システムを整えることを提案した。そして病院内部に＜企業等級管理制度＞を制定し、病院企業の集団化、大規模化の方向に発展する基礎を打ち立てた。

本院が編集発行する＜中日友好医院学報＞など学術刊行物は、病院内の学

術的な雰囲気盛り上げており、病院の学術水準向上に一定の貢献をしている。編纂された<中老年保健>は10万部を超え、北京の同類の刊行物のトップとなり、比較的良い社会収益をあげている。

六、職員のために行ったいくつかのこと

95年度に病院は、職員のために48棟の住宅を購入し、住宅分配委員会が決めた分配基準と順番を厳格に守り、公平で合理的に職員の手引き渡した。目下病院では、各方面から資金を得ることに努めており、引き続き職員住宅の購入を行い、職員の住宅逼迫状態を緩和することになっている。

自転車置き場を建て、10年来の無管理状態、紛失事故の続発問題を解決した。

3号棟、4号棟、5号棟とネオンサインのある棟のエレベータの老朽化が大きな問題であり、常に停止事故が発生し、職員から強い意見が出されていた。95年にはこれの徹底的な修理改造をおこない、不安定要素を取り除き、職員の利便を講じた。

七、存在する問題点

新たな挑戦にあたって、われわれは引き続き思想を解放し、観念の転換をおこない、事実に基づき仕事をして、大胆に刷新を進めなくてはならない。

成果は上がっているが、われわれはいっそう頭脳をはっきりさせ、兄弟機関と比べれば、なお大きな差があることを認識しなくてはならない。

本院の医療の質とサービス態度には、まだまだ人々の意に合うものではないものがある。来院して不満を述べる者や、医師と患者が紛糾することはしだいに減少しつつあるが、なおいっそう病院全職員がこの点に目を向けなければならぬ。

患者数の相対的な不足と、ベッドの回転率の悪さは、病院の経営に強く影響をおよぼしている。目下、本病院のベッド回転率は平均31日であるが、患

者の増加によって、それを平均して20日間前後にすることが合理的である。

経営業務を強化し、採算をとることに努め、さまざまな方法によって収入を増加させ、支出を節約し、浪費をなくし、“貨比三家”などの方式によって、物資供給と物流方法を解決することが、目下、もっとも解決が急がれる課題である。

幹部と人事業務において、競争システムの側面を強化する必要がある。また、情報管理業務も進展が必要であり、コンピュータ管理を推進し、国内外の情報ネットワークとの接続を進めねばならない。

本院の中西結合の優点を引き続き発揮し、学術工作においては、特に中西結合を突破口としてゆくことに注意を向けねばならず、重点をとらえ、全体の先導役となり、病院の学術特色を形成しなければならない。

1996年を、本院は「学術の年」とする。一致団結し、積極的に新しきを求め、たゆまず努力し、引き続き基礎づくりに注意をはらい、共に「科学教育で病院を発展させる」という歴史的使命を担ってゆかなければならない。

一九九五年財務収支決算説明書

一、一九九五年財務収支目標：業務収支のバランスを取る。

1、業務収入は1.3 億円に実現し、前の年より23.8% が増える。

2、業務支出は1.3 億円。

3、国からの支出金は784 万円を加え、年末に収支に754 万円の残高を実現させる。

二、一九九五年収支決算の状況

1、収入状況

一九九五年業務収入状況一覧表 (単位：万円)

	項目	1995年	1994年	増加	増加率
	業務総収入	16433.94	10760.91	4673.03	43.42%
分 類	1.医療収入	5537.40	3987.91	1550.22	38.88%
	2.薬品収入	9197.21	6474.32	2722.89	42.05%
	3.制剤収入	120.89	110.28	10.61	9.61%
	4.別の収入	578.44	189.17	389.27	205.77%
	国への支出金	784.00	889.30	-105.30	-11.84%
	総計	16217.94	11650.21	4567.73	39.20%

2、支出状況

1995年支出状況一覧表 (単位：万円)

	項目	1995年	1994年	増加	増加率
	予算総支出	16068	11580	4487	38.75%
分 類	1.職員給料	1382	1188	194	16.32%
	2.補助給料	1233	911	322	35.34%
	3.福利金	94	82	12	14.63%
	4.退職金	176	145	31	21.38%
	5.病院支配金	300	300		
	6.部門配分	12833	8954	3879	43.87%

3. 収支残高	
業務収支欠損	-634万元
退院外来患者借金	-8万元
差額予算補助	784万元

実質残高 142万元

4. 残高配分

残高配分一覧表

(単位：万元)

項目	百分率	残高
1. 事業発展基金	40%	56.80
2. 集団福利基金	22%	31.24
3. 職員奨励基金	35%	49.70
4. 院長基金	3%	4.26

三、専用基金状況

専用基金使用状況表

(単位：万元)

項目	引き出す数	支出数	残高数
合計	3500.61	3345.22	155.39
1. 一般修繕基金	1543.39	1673.28	-129.89
2. 大型設備更新修繕	793.11	436.20	356.91
3. 事業発展基金	58.14		58.14
4. 福利基金	40.22	230.93	-190.71
5. 職員奨励基金	49.80	1.80	48.00
6. 院長基金	4.26	0.45	3.81
7. 勤務外医療手配手数料	1011.69	1002.56	9.13

四、特別支出金

特別支出金

項目	支出金額	支出年度
1. 電話回線容量増加	100万元	1994年
2. 高低圧変電更新改造	100万元	1994年
3. 汚水処理改造およびトイレ修繕	100万元	1994年
4. 検査設備の更新	51万元	1995年
5. 外国人小児病室改造	150万元	1995年

五、1996年の財務予測と分析

1995年に、我々は衛生部計財司の直接的指導に従って、北京市の大規模制度（重病に掛かる費用を管理する）という改革に乗って、既に437の会社の延べ12.8万の社員と契約した。業務収入は昨年より4673.09万元に増加し、49.43%に増やした。1996年に、財務管理に関してより厳しくするうえ、^新全院職員が業務に対する熟意を高めて、ベッド数の回転率を向上させ、外来量をより増加し、更に大きな社会実益と経済利益を取めると共に制約力も強める。特に支出を厳格的に押さえて、消耗的な支出を減少し、収支バランスを実現するために努力していく。

中日友好病院

1996年度業務計画大綱

院長 陳紹武

1996年は、われわれは安定と発展をもっとも重視しなければならず、これが奮闘の二大課題である。われわれは、病院党委員会の指導のもと、また職員代表者会議の監督を受けつつ、「病院には重点があり、科には特色があり、人には専門長所がある」ようにする要求に基づき、業務の重点を学術建設において、病院全体の各業務を行ってゆかねばならない。

同時にわれわれは、引き続き基礎の質の向上を図り、一步一步、病院のすべての面に管理が行き届く経験を積み、絶えず医療サービスの水準の向上に努め、さらに大きく人材を育成し、科学教育で病院を盛り上げなくてはならない。改革を深め、開放を拡大し、病院が三級特級病院となるため、着実な歩みをしてゆかねばならない。われわれは団結して、病院の全職員がこの重任を肩に担い、新たな段階に登はんするためにともに奮闘してゆく。

一、重点を学科建設におき、良好な学術の気風を作り上げる

永年来、われわれは医と看護要員の“三基三嚴”訓練をたゆまず堅持してきた。窓口サービスをたえず強化し、また一連の大型の活動と突発的な事件の中でチャンスをつかみ、名声を高くしてきた。病院の知名度が高まり、1995年、本院は最高で一日の外来診療が2,400人を突破した。病棟の治癒率は90%を越え、年間収入は1億5千4百円という、病院創立以来の最高を記録した。

これらの成績を前にして、われわれは、この成果をいかにして堅め、拡大するかを考えねばならない。

中日友好病院は、年若い病院である。われわれは「活気、進取、緊張、謙虚、そして良く学ぶ」特徴を存分に発揮して、学術建設に大いに力を入れ、各部局の人々を総動員して、各自の職種の業務学習を展開し、2004年までに、一連の特色ある医療サービス項目を打ち立てなくてはならない。また、名声を有する一群の学術リーダーを育成し、衛生界におけるわが病院の学術上の地位を定めなくてはならない。病院は一步一步、人々の先頭に立てるように努め、国民の期待に答えてゆく。

1、十の研究センター構想を論証し、重点学科建設を加速する

1994年以来、本院は重点科・室の審査業務に着手してきた。これにより臨床科・室の学科建設を押し進め、すでに初歩的な成果を生んでいる。

1995年、本院が計画に着手した病院発展の第二期十年計画では、科学研究、臨床、教学、開発を一体とし、基礎研究と臨床応用を結合させた十の研究センターを設立しようとしている。この構想が提出されて以後、関係する科・室では初歩的な予備討議をおこない、各センターの設立準備案を提出してきた。

本年、われわれは専門家を組織して、要員の状況、設備条件、これまでの業務成績と基礎など、各方面から深くこの十の案の適切か否かを論証し、同時に、これらに関する大量の前段業務を展開し、すでに初歩的に形が整えられつつある。われわれは、これらを重点的にもりたて、優先して設備を配置し、立派な人材を編成し、科学研究費を増額するほか、各人の収入についてもある程度の配慮を講じ、本年度中にその雛形ができるように努め、本院の重点学科建設の参考モデルとしたい。また同時に、病院全体の臨床科室において配置転換をおこない、独自に建設を展開する積極性をもたせ、臨床科室建設を新たな段階に踏み込ませたい。

重点学科建設の資金問題については、一面で、限りある事業経費の中から引き続き科学研究に投入する金額の比率を上げ、もう一面では、これらの科室が各種の科学研究基金を申請するよう鼓舞激励するようにしたい。同時にわれわれは、科学技術開発と国外の無償援助を重視してゆく。広く財源を求

めることは、重点学科建設の一つの大切な保証である。

2、中西医結合業務を強化し、その特色を発揮させる

われわれが当面する二つの大きな任務は、一に世界の先進医学に追いつき追い越すことであり、もう一つは、中西医結合によって新しい企画をうち出すことである。これは中国の実際に適合した一大新機軸である。中医学は、一体観を重んじ、“天人統合”を尊ぶ。これは近代医学の“生理－心理－社会”モデルと異曲同工の妙があり、ここにその先進性がある。

病院創立時から、われわれは中西医結合を本院の学術特色としてきた。本年の学術建設においても、この優点をつづけて発揮し、大いに学術研究活動をおこなう。わけでも、ルドルフ中国伝統医学基金による四つの新薬研究製造課題は、本年は臨床実験段階に入る。一日も早く成果を生み出すと共に、基金への応募を助け、さらに多くの課題を取り入れ、病院全体で中西医結合研究をおし進めてゆく。

中西医結合の学術交流については、本年は、日本の国立循環器病センターと富山医科大学が、それぞれ本院と交流活動を行うことになっている。また日中第三回中西結合大会の準備を積極的におこなう。本院は広く優秀な人材を招聘して中西医結合研究室を拡大し、これを対外型研究室としたい。

3、国際的な合作を助け、いち早く世界の先進技術に接近する

世界の先進技術に追いつき追い越すこともまたわれわれの重大な任務の一つである。われわれは何よりもまず、謙虚で慎み深い態度で、国際間の合作を拡大し、国内外の同業に真摯に教えを請い、一步一步、世界の先進技術に向かって邁進したい。

昨年には、近赤外線生物光学国際実験室が始動した。本年はその開発型、開放型の特徴を引き続き発揮させ、知力を引き入れて、科学研究成果の転嫁に力を入れ、実験室の業務が実質的な進展を見るようにしたい。

二、質的基礎の管理を維持し、各項目のサービス水準を高める

重点学科建設と学術建設をしっかりと行うと同時に、各項の基礎工作の質もおろそかにしてはならない。とりわけ本年、わが病院は“三級甲等病院”の資格再審査を受ける。各項の質的基礎は、本院が“三級甲等病院”資格を持ち得るか否かに直接関わる事柄である。したがって、引き続き“責任性、期間、効果”の三要素を強調し、すべての人、すべてのプロセス、すべての方向の質的管理を行ってゆく。

1、職場での育成訓練を強め、業務学習を全病院の流れとする

医療業務の質の評価では、第一に診療技術がしっかりしているか否かが問われる。医師たちの診療技術の水準を高める鍵は、職場における訓練を充分に行うことである。

数年来、入院医師の訓練において、われわれはすでに単位制管理方法を作り上げてきた。本年の業務においては、これをさらに厳格に実施し、効果あらしめるようにする。考課を強め、すべての虚偽を弄する行為を廃絶し、入院医師が発奮して学習するよう促し、業務水準をたえず高めるようにしたい。

このほか、主治医師以上の医務要員の、職場における訓練も重視しなくてはならない。各科室の建設、わけでも重点科室の建設においては、学術リーダーが重要な役割をはたす。科の主任は、常に新知識を得る先頭に立つべきであり、日新月歩の医学の発展に追いつくべく、皆を率いてゆかねばならない。また、ここ三年以内に病院全体の四分の一の科室で世代交替が必要となる。そのため、仕事を引き継ぐ三～四十代の主治医師には、いっそう刻苦研鑽が求められる。この人々の素質の如何は、病院の今後数十年の発展に直接かかわる事柄である。

従って、医務部と各科主任が共同して、さまざまな段階で多様な形式の職場教育をおこない、病院全体に濃厚な学習の気風を作りだすようにしたい。

2、二つの百のサービスと、職業道德の強化

患者の医療サービスに対する満足度は、医療業務の質を計る一つの評価基準である。1995年、本院は“双百工程”運動を展開し、大きな成果を納めた。本年われわれは、一つ一つの科・室が、さらに患者サービスの範囲を拡大して、患者が「お客になった感じ」になるようにしたい。「患者第一」は、サービスの永久に変わらぬテーマである。

同時に、われわれは職業道德の強化に力を入れてゆく。これまでも一貫して、業務上の腐敗を戒め、謝礼の受けとり、コミッションなどの規則違反は厳格に処理してきたが、劣悪な態度、労働規律違反なども軽く見ることは許されない。これらについては、教育と経済的処罰をもって対処する。たゆまぬ職業道德建設によってのみ、中日友好病院は良好な雰囲気を持することができる。

3、三基三嚴教育の展開と、業務の制度化、規格化

(略)

三、社会主義市場經濟に適應し、病院經營を強める

社会主義市場經濟体系が確立してゆくにともなって、經濟体制の改革は日々深まっている。この中で、一つには、公費医療費が日増しに増加し、国家の負担を重くしている。またもう一つには、国家の諸事業の中で、衛生事業に当てられる支出の比率が年毎に下降しており、病院事業の経費は不足している。従って、病院が生き残り、発展するための經營管理は重要な議題となっている。

1、物資の購入と供給をしっかりと把握し、管理を厳格にする

管理すべき物品の種類は極めて多く、資金に占める比重も極めて大きい。病院經營業務の中で、これは大切な節目の問題である。本年、われわれは、購入、供給、物流、使用の全般にわたって管理業務を改善し、集中管理・コンピュータ管理方式を取り入れ、収入を増やし、支出を押さえる仕事で大き

な成果をあげたい。

2、科・室ごとの採算を明確にし、収支を連結する

物資管理を良く行うことは、科・室の採算を明確にする基礎である。しかしそれは、採算をとることの上では一部分の事柄である。本年は、科・室がそれぞれ採算ベースに乗るよう力を入れ、科・室ごとに収支の均衡をたもつようにしたい。

科と室の二つのクラスで採算ベースに乗ることは、本院の経済工作を新たな高い段階に至らしめる事柄であると確信している。近い将来、さらに三つのクラスで採算を取るようにし、社会主義市場経済体系の下での病院経営管理のモデルとなるようにしたい。

四、情報センター建設に力を入れ、コンピュータ応用管理を強化する

情報は、病院業務計画と方針策定の拠りどころであり、業務においては、流れを制御する有力な道具である。指導業務においても、各系統の調整を進める手段である。近代的管理においては、人、カネ、物の三つの基礎的要素に、さらに情報と時間という二つの大切なものが加わる。

病院の党委員会は検討の結果、1996年度には本院の情報センターの面目を一新することを決意した。特にコンピュータの応用管理を強化し、ネットワーク作りを情報センターの仕事の重点とする。ネットワーク作りは、病院業務の実際からかけ離れたものではなく、計画と目的をもって逐次すすめるようにする。われわれの短期目標は、1996年度において大病統括管理業務と連動させ、外来会計系統のライン作りをおこなう。中期目標は、科・室の二クラスの採算をとる業務が一定の効果を見せた段階で、病院全体の財務系統のラインを結び、病院の経営管理業務を一段高いものとする。長期目標は、病院の経済的力の高まりが明らかになったのち、医療、看護、科学研究、教学、行政、バックアップ部門の業務情報をコンピュータネットワークにすべて取り入れ、真に近代化された大型総合病院の管理水準を実現させる。

五、続けて改革を深め、病院全体の発展を促進する

1996年、本院は、ここ数年来の改革の経験を総括した上で、さらに全職員の思想を解放し、より良く、事実に見合った、実行可能な新しい改革案を定める。同時に中央経済工作会議の精神を真摯に受けとめ、経済体制への移行と経済伸長方式によって、病院の新たな措置をうちだす。

われわれは、全面的な質の管理を中心に、“業務効率、経済収益をテコとし、質はその成否を握る”とする「総合目標管理責任制」を高めてゆき、臨床と医療技術など科・室の積極性を促し、本院の医療水準とサービスの質的向上を新たな段階に上げたい。

数ヶ月前、本院は“第二回企業管理工作会議”開催し成果をあげた。引き続き広い視野で統括し、経営管理体制を改善し、採算ベースをとり、経済収益を高め、法を守り、健康な発展をするよう努めるとともに、競争システムをつづけて取り入れ、一部企業においては、法人による危険負担をとまなう請け負いを逐次すすめ、経営者を募る。また、積極的に条件を作り、機会をみて企業（集団）総公司を設立する。野放し型から集約型に向かう過渡期において、本院の企業が真に社会と市場に出て行くなれば、それは本院の医療と科学研究の発展のために新たな貢献を成すものとなろう。

六、病院の文化建設に力を入れ、職員の豊かな余暇生活をはかる

1995年は、病院の文化建設においても実りがあった一年である。本院の白雲合唱団は、いくつかのコンクールにおいて奨を得た。また本年、有名な台湾陽明医学院の交響楽団が自主的に北京訪問を申し出た際、本院の白雲合唱団と北京医科大学合唱団は、ともに手を取りあって「黄河大合唱」を公演した。海峡兩岸で同じ医療界にある人々が、母なる大河を合唱したことは、中華の子孫は一つになりたいと願う心を揺さぶるものであった。

1996年、われわれは、労働組合と共産主義青年団病院支部が、多くの大衆と青年の中で役割を果たすよう努め、豊富多彩な文化活動を組織し、また、

職員が多忙な業務の疲れをいやすよう配慮し、健康的な余暇活動を展開するようになりたい。

七、病院の九五計画を制定し、2010年までの長期展望を描く

1996年は、本院が発展をとげる鍵となる一年になるであろう。この一年、われわれは鄧小平同志の“中国の特色をもつ社会主義を建設する”という理論を遵守し、党の基本路線を遵守して、病院発展の九五計画を策定し、2010年までの長期展望を描いた。このためにわれわれは、“チャンスを見逃さず、改革を深め、開放を拓き、発展を促し、安定を保つ”ことを基本方針として、“科学教育によって病院を盛んにする”という戦略を貫徹、実行する。

改革発展と安定の関係をより良く処置し、本院の各種業務において、持続、迅速、健全な発展をとげさせ、全面的な進歩を勝ち取りたい。

中日友好病院は創立から十一年になる。この十一年間、多くの先輩指導者、先輩専門家が病院の発展のために心血を注いだ。病院の社会的知名度は高くなり、国際的影響力も日増しに増大している。好敵手が多数いる中で、病院はなお、長期の刻苦奮闘を必要としている。今後とも、われわれはしっかり足を踏みしめ、一日に千里を求めることなく、日々邁進してゆかねばならない。

中日友好病院が大きな飛躍をとげる日が到来することを確信している。

一九九六年病院財務予算の概況

一、1996年財務収支目標：業務収支のバランスを取る。

1. 業務収入は2 億元に実現し、前の年より29.58%に増える。
2. 業務支出は2 億元。
3. 国からの支出金は800 万元を加え、年末に収支に800 万元の残高を実現させる。

二、1996年収支予算の概要：

1. 収入予算

項目	数量
業務収入	2 億元
1. 医療収入	7455 万元
2. 商品収入	1 億2050万元
3. 製剤収入	162万元
4. 別の収入	333万元
国からの支出金	800万元
総 計	2 億800 万元

2. 支出予算

項目	数量
予算総支出	2 億元
1. 職員給料	1550 万元
2. 補助給料	1450 万元
3. 福利金	97 万元
4. 退職金	200 万元
5. 病院支配金	300 万元
6. 部門配分	1 億6403万元

3. 収支残高

業務収支欠損	0
予備医療欠損	-20万元
差額予算補助	800万元

残高 780万元

4 残高配分

項目	百分率	数量
1. 事業発展基金	40%	312.0万元
2. 集団福利基金	22%	171.6万元
3. 職員奨励基金	35%	273.0万元
4. 院長基金	3%	23.4万元

三、特別基金予算

(単位：万元)

項目	引き出す金	支出金	残高
合計	4753.0	4461.0	292.0
1. 一般的な修繕基金	2000.0	1800.0	200.0
2. 大型設備更新維持	793.0	793.0	
3. 事業発展基金	312.0	300.0	12.0
4. 福利基金	171.6	171.6	
5. 職員奨励基金	273.0	273.0	
6. 院長基金	23.4	23.4	
7. 業務外医療サービス手数料	1180.0	1100.0	80.0

四、特別支出金

1996年の特別支出金を申請する予定

項目	支出金額
1. 外国人リハビリ病室改造	200 万元
2. 地下共同溝改造	150 万元

⑤ 中日友好病院への協力実績

1. 中日友好病院の設立の背景・経緯

1977年	<p>中国政府は、近代化政策を推進すべく党の11全大会で「4つの近代化（農業、工業、科学技術、国防）」を正式規約に盛り込んだ（保健医療の近代化を含む）。</p> <p>医療水準の向上等を図るため全国に近代的病院を建設することを企画し、まず、北京にモデル的近代病院として「北京市近代病院（後に中日友好病院）」を建設する計画をたてた。</p>
79年12月	大平総理訪中。北京市近代病院建設計画に対する積極的協力の意図を表明。
80年 2月	第1回事務レベル協議
3月	保健医療技術協力調査視察チームの訪中
4月	北京市近代病院協力専門員会の設置
5月	華国鋒総理の訪日
	大平総理は、建設計画に対する無償資金協力及び要員養成に対する技術協力を行う用意がある旨表明。
12月	<p>第1回日中閣僚会議</p> <p>日中双方は、中日友好病院建設計画が順調に仲展していることに満足の意を表明</p>
81年 1月	<p>基本設計完了（無償資金協力）</p> <p>実施設計E/N（無償資金協力）</p>
3月	プロジェクト方式技術協力事前調査団の派遣（技術協力）
5月	JICA技術協力「中日友好病院国内委員会」の設置
8月	実施設計完了。無償資金協力に関するE/Nの締結
11月	<p>技術協力のための実施協議調査団の派遣（R/Dの署名）</p> <p>↑ 技術協力開始</p> <p style="text-align: right;">病院建設起工（12月）</p>
82年	第1次3カ年技術協力
83年	(81.11.19- 84-10.22)
84年	<p>×</p> <p style="text-align: right;">「中日友好病院」完工（84年6月）</p>

85年		
86年		第2次5カ年技術協力
87年		(84.10.23-89.10.22)
89年	X	
90年		フォローアップ技術協力
91年		(89.10.22-92.10.21)
92年		
93年		
94年	↑	アフターケア技術協力 *貴賓医療センター問題発覚
95年	↓	(94.10.28-95.10.27) 第1回合同委員会(95.1.9)
96年		第2回合同委員会(96.4.19)

2. 中日友好病院概要

(1) 施設概要

北京市東北部の和平里地区に所在する10haの敷地に建設

総合病院 (59,100㎡)	地下1階地上14階、ベット数1000床 外来診療部門(14科)、中央診療部門ほか
臨床医学研究 所(6,800㎡)	地下1階地上6階、 生物物理、薬物、病理生理、免疫、生化学の5部門
看護学校 (3,100㎡)	地上4階
リハビリテーション施 設(9,800㎡)	地下1階地上6階、ベット数300床、
人 員	医師数約680名 看護婦、件区湯職員、一般職員等 計約2600名

(2) 建設機材計画への協力(無償資金協力)

(イ) 中日友好病院建設計画(81年、82年、83年3期に分けて実施)

総額 160億円

(ロ) 中日友好病院機材整備計画(86年)

総額 5.74億円

3. 中日友好病院の使命

- (1) 日中友好のシンボル
- (2) 中国の伝統医学である中医と西洋医学との結合（中西医結合）という中国独自の医療を追求するモデル病院
- (3) 中国における近代化のモデル病院
- (4) 臨床に加え、教育、研究活動も行う総合医療センター

4. 技術協力

中日友好病院の運営に必要なスタッフ等（医師、医療技術者）を養成するため、81年から92年の11年間にわたり協力を実施し、また、アフターケア協力として94年から1年間協力を実施した。

また、支援体制を固めるため国内委員会（委員長：井出・千葉大学学長（当時））を設置した。

国内支援機関：国立国際医療センター、国立ガンセンター、
国立循環器病センター、病院管理研究所、千葉大学ほか

本体協力期間	81.11.19 - 84.10.22（第1次3カ年） 84.10.23 - 89.10.22（第2次5カ年）
7+0-777° 協力	89.10.22 - 92.10.21
777-77- 協力	94.10.28 - 95.10.27

(1) 第1次協力（81.11.19 - 84.10.22）

協力内容	・ 診療技術の向上 ・ 中国伝統医学の近代的医学による研究の促進 ・ 病院運営管理
協力実績	・ 研修員受け入れ 計60名 ・ 専門家派遣数 計39名

(2) 第2次協力（84.10.23 - 89.10.22）

協力内容	・ ガン、心疾患等相互に合意した特定疾病の成因、診断治療等の研究 ・ 各科の診療水準の向上 ・ 病院運営管理の整備
------	---

協力実績	<ul style="list-style-type: none"> ・研修員受け入れ 計 119 名 ・専門家派遣 長期 計 31 名 <li style="padding-left: 20px;">短期 計 63 名 ・機材供与 臨床診断医療器材等 計約28400万円
------	--

(3) フォローアップ (89.10.22 - 92.10.21)

協力内容	<ul style="list-style-type: none"> ・効果を上げつつある分野への協力の継続 ・中央検査室、画像診断室等の中央診断部門の強化 ・臨床各科との密接な連携の促進
協力実績	<ul style="list-style-type: none"> ・研修員受け入れ 計 11 名 ・専門家派遣 長期 計 7 名 <li style="padding-left: 20px;">短期 計 26 名 ・機材供与 計約13000万円 (臨床診断医療器材等)

(4) アフターケア協力 (94.10.28- 95.10.27)

移転した技術の定着状況を踏まえ技術移転が必要な分野として次の協力を実施。

協力内容	<ul style="list-style-type: none"> ・腹腔鏡を用いた胆石症の技術指導 ・マレットジヨセ7病に関する基礎的臨床研究
協力実績	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家派遣 短期 計 2 名 ・研修員受け入れ 1 名 ・機材供与 約4000万円 (腹腔鏡、DNAソッセイザー等)

(5) 評価概要

- (イ) 各科の技術レベルは高い水準に達し、技術移転は所期の目的を達成。
- (ロ) 同病院は外国人外来部門を有しており、開院以来、中国に在住する延べ10万人以上の外国人(日本人を含む)が利用しており、在留邦人の医療ケアにおいても重要な役割を果たしている。